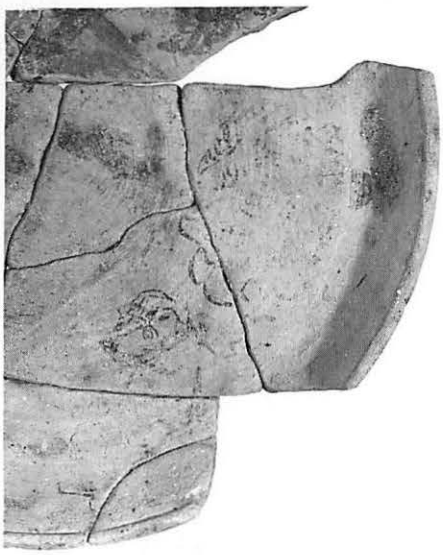
長屋王邸出土の墨画土器

平城宮跡発掘調査部

第184次調査で，猿や，犬と見られる動物などを描いた墨画土器が出土した。これは，長屋王邸内の，中心区画の東を限る塀のすぐ東方にある井戸から出土したもので，平城宮土器編年II期の土師器皿AIに描いたものである。口径21.2cm，高さ2.1cmをはかる。土器の内面には墨のこぼれた痕跡があり，硯の下皿として使用していたものを利用したのであろう。土器の外面には，手，足を含めて全身を描いた1匹の猿と，顔だけを描いた4匹の猿の墨画がある。土器には焼成の際に黒変した部分があるが，そこにも墨画をしている。そのほかに，筆ならしと思われる数条の墨線や，「船連縣麻呂」，「進」，「幡下」などの文字もある。また，内面には枝葉，幹を持つ樹木や，犬の顔とも見れる動物の墨画がある。

猿の表現を見ると，最初に目の部分だけを試し描きし，段階的に描写範囲を広げていった過程が追える。描写や筆遣いが正確なことから，絵画の技術を持つ人間の手になるもので，本格的な絵を描く前に土器に下描きをしたものであろう。出土状況から見て，長屋王邸内で描いた可能性が高い。土器に描いた動物の墨画は，これまでに鳥や馬が出土していたが，猿は初見である。また，天平宝字年間～平安時代初頭に製作された，唐招提寺金堂の梵天像の台座の反花にも猿と見られる墨画がある，今回出土した墨画の年代はそれより30～40年遡る。これは，日本における最古の猿の墨画であるとともに，法隆寺金堂の天井に描かれた動物の墨画との空白を埋める美術史上でも貴重な発見である。（墨画に関しては，奈良国立博物館の西川杏太郎館長，河原由雄仏教美術研究室長をはじめとする諸氏の教示をいただいた。）　（玉田芳英）



内面の墨画、墨痕（部分、縮尺1/2）

外面の墨画（縮尺1/3）